

氏名(本籍)	はやし たく や <b>林 琢也 (青森県)</b>		
学位の種類	博士(理学)		
学位記番号	博甲第4971号		
学位授与年月日	平成21年3月25日		
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当		
審査研究科	生命環境科学研究科		
学位論文題目	<b>Characteristics of Agritourism Regions in Japan: The Case Study of Cherry-growing Areas</b> (日本における観光農業地域の性格－サクランボ産地を事例に－)		
主査	筑波大学教授	理学博士	田林 明
副査	筑波大学教授	理学博士	手塚 章
副査	筑波大学教授	理学博士	山下 清海
副査	筑波大学教授	理学博士	村山 祐司
副査	筑波大学准教授	博士(理学)	松井 圭介

### 論文の内容の要旨

本論文は、日本の観光農業地域の性格を明らかにするため、観光農業の発展を支えるさまざまな主体に着目し、それらの地域に与える影響と役割を都市への近接性と産地の規模の異なる複数の事例地域の分析を基に検討した。観光農業の主体とは、観光化を推進する農家(リーダー)とそれを支える農家(フォロワー)、観光農業に関わる組織、そして行政・農協である。また、観光農業とは、農場内での農作業や収穫体験を観光と結びつけたもので、農産物の販売促進を図るために、戦略的に多数の観光客を受け入れる農業の形態である。

これまでの研究から観光農業の成立には都市への近接性と観光客の来訪を促す知名度の存在が重要とされ、果実が最も観光農業に適応した品目であるとされている。知名度とは、特定の作物の栽培の歴史や伝統、「産地」として消費者に認知されていることを示す。そこで、栽培地域および収穫期が限定的であり、高い付加価値を有するサクランボを対象に、集客圏となる市場(都市)への距離と産地の規模からサクランボ産地を類型化し、それぞれの類型を代表する3つの研究対象地域を抽出した。すなわち、大規模産地の山形県村山地方(寒河江市)と中規模産地で東京大都市圏に近接する山梨県甲府盆地西部(南アルプス市)、大都市圏からは遠く、地方都市の近郊に位置する青森県三八地域(南部町名川地域)である。

これら3地域における観光農業の性格を分析した結果、日本におけるサクランボの観光農業地域は、個別経営型(大都市圏の中規模産地)、地域振興型(遠隔地域の中規模産地)、地域農業型(大規模産地)に大別することができた。大都市圏に近接する中規模産地では、立地条件を生かした個々の農家による積極的な経営や販路の開拓がみられ、農産物の販売手段・顧客獲得の契機として観光農業の存在意義は高まる傾向にあった。また、遠隔地域の中規模産地においては、サクランボ狩りや直売・宅配といった経営内容にとどまらず、農業体験や修学旅行といった活動にも農家が積極的に関わり、行政の地域振興策と連携することが集客や経営の安定にとって不可欠であった。また、それには農家と行政、地域住民(非農家)を繋ぐリーダー

の存在が重要であった。これに対し、大規模産地では、観光農業に従事する農家の割合は中規模産地に比べて高くはない。しかし、その知名度や注目度は非常に大きく、観光農園はサクランボ産地を直に消費者に披露するショーウィンドウのような存在であった。反面、観光農業を積極的に進めてもそれ以外の流通経路を経たサクランボの品質が悪ければ、産地全体の発展は期待できないという側面もみられた。このため、一定以上の品質を保持するための栽培技術を地域内の農家が継承・共有し、市場外流通・市場流通の双方を成長させることが重要であった。

以上のことから、地域条件によって、観光農業にかかわる主体の役割や主体間の連携のあり方が違っており、観光農業が個々の農園や地域農業、さらには地域経済といったさまざまな空間スケールに及ぼす影響も大きく異なってくることが明らかとなった。こうした傾向は、栽培地域が限定されているサクランボにおいて顕著ではあるが、産地の規模や市場となる都市圏の規模を考慮し、その主体の活動を検討することは、他の農産物や農業地域を考察する上でも十分に適用が可能と考えられる。

### 審 査 の 結 果 の 要 旨

従来 of 農業・農村地域を対象とした地理学的研究は、主として農村の生産機能に着目して進められてきたが、本研究は観光産業と結びつくことによって農業・農村が発展するという新しい現象に取り組み、複数の事例研究を積み上げることによって、現代の農村地域の性格を系統的に把握したものである。この研究は、生産の場としてよりも消費の場としてみなされる傾向が強くなった 1990 年代以降の日本の農村地域の性格と構造を解明する上で大きな貢献をした。また、日本のみならず、ポスト生産主義の時代に入った先進工業国の農村地域にも応用が可能な研究成果である。

これまで個々の観光農業地域に関する研究蓄積はなされてきたが、本研究のように地域条件の異なる観光農業地域を系統的に分析し、観光農業地域の性格の一般化を追究したものはほとんどなかった。精力的なフィールドワークによって収集した詳細なデータや資料に基づき、新たな農村地域形成の主体に着目するという枠組みを用いて、観光農業地域の性格が、市場との位置関係と農業地域自体の規模によって規定されることを明らかにし、農村地域の地理学的研究に新たな分析視角を提供した。また、現代の農村地域において観光農業に取り組む主体の活動に注目し、異なる地域条件のなかでは、さまざまな空間スケールにおいて主体の役割が異なったものになるということを明らかにした点が特に評価できる。

この研究は、地理学のみならず隣接諸分野からも注目される内容と分析の視点をもっており、博士論文として十分な価値があることが認められる。

よって、著者は博士（理学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。